

## 第4回 J-GBF 行動変容ワーキンググループ 議事概要

1. 日時：令和5年3月28日（火）13:30～15:00
2. 開催方法：オンライン（Webex）
3. 出席者

（座長）大阪大学 特任准教授

佐々木 周作

（専門委員）国立環境研究所 生物多様性領域 主任研究員

久保 雄広

（専門委員）株式会社バイオーム 代表取締役

藤木 庄五郎

（J-GBF 委員・関係者・一般傍聴者：60名）

経団連自然保護協議会

国際自然保護連合日本委員会（IUCN-J）

公益社団法人 日本動物園水族館協会（JAZA）

公益財団法人 日本博物館協会

地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）

NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）

生物多様性自治体ネットワーク

農林水産省

消費者庁

### 4. 開会

ご挨拶 環境省 自然環境局主流化室 浜島 直子 室長

・昨年12月にCOP15が開催され、生物多様性の議論が国際的にもますます高まっている。次期国家戦略ももうすぐ策定される。まさに生物多様性元年という表現をする方もいる。

・企業関係の対応が話題になりがちだが、企業が動くためには、消費者一人一人の行動が変わっていくことや意思表示が必要となる。

・また企業自身の行動変容のヒントも、この行動変容WGでは議論していただいている。

・本日は事務局から今年度の取りまとめを報告するとともに、来年度以降の活動内容について活発に発言いただきたい。



## 5. 議事

### (1) MY行動宣言の活用について

資料1「MY行動宣言の活用について」事務局より説明

(IUCN-J 道家氏)

「これまでの経緯と動物園・水族館版」の説明

(資料「UNDB-JにおけるMY行動宣言の振り返りとJ-GBFへの示唆」)

### ○質疑応答

(佐々木座長)

・事務局から報告のあったMY行動宣言の活用事例A～Fについて。各事例にタイトルが付けられていて分かりやすいが、別の整理の仕方もある。Aは会社での取組。Bは宣言しやすいタイミングや場所の選定の工夫。CとDは宣言したくなる仕掛け、シールを貼るなど楽しい行為の工夫。Eは5つのアクションを揃えることを楽しむ工夫。Fは宣言とは違うアクションをMY行動宣言とみなすこと、などと整理することができる。

・この活用事例から、自分たちのものとして展開できるかを考える参考になる。

(事務局)

・活用事例についてはUNDB-J時代に作成したものの中から抜粋したアイデア。どういう形で宣言してもらうかで整理すると、事例集自体の違う使い方ができると思った。

・今後、J-GBFのサイトでも活用事例を継続して集めて掲載していきたいが、事例をまとめる際に整理の仕方を検討していく。

(久保委員)

・MY行動宣言と行動変容とのギャップをどう埋めるか、ギャップをどう測るのかをもう少しクリアにした方がよい。MY行動宣言が行動変容にどうつながるかについては、どう考えているか？

(IUCN-J 道家氏)

・宣言した後の行動がどう変わったかまでのフォローはできていないので、その点は課題。  
・気づきのきっかけをたくさん増やすことは大事だろう、いずれ行動につながることを願って、というぐらいに割り切っていた。

(久保委員)

・宣言だけで、行動までつながっていると明言するのは難しいと思うが、行動までつなげていくことを目指すべきだと思う。

(藤木委員)

- ・宣言は行動変容への第一歩というのも納得感があるが、何らかの心が動く体験になるということが必要であると思う。なるほどと感じて宣言できる状態を作ることが大事。そのために派生版が機能すると期待している。
- ・クイズなど考えながら行動して体験していく中で宣言につながるという流れを作れるのは、派生版の良いところだと思う。

(佐々木座長)

- ・藤木委員は、環境省と新宿御苑でシートの派生版を使用したと思うが、そこで宣言した後のユーザーの方の行動がどう変わったかは追跡可能なのか？

(藤木委員)

- ・アプリを使って追跡していくことは可能。一度宣言してから、その後に追跡してアンケートをするなど、実際にどのように行動が変わったかは、きちんと設計すればできると思う。

(佐々木座長)

- ・全ての場面で行動を追うことは難しいと思うが、最新の機器で環境的にできることがあるなら、来年度以降、検討できるとよい。

(事務局)

- ・行動を変えるには大きく分けて2通りあると思う。1つは、意識を変えて行動を変える、そのための情報を提供する。もう1つは、意識はどうあれ行動をしてもらう。後者はナッジやプライシングがあるだろう。政策として両方あるが、MY 行動宣言は前者。
- ・世論調査で実際に環境に配慮した行動をとっているかという質問をしている。実際に行動をとっている人の割合を増やしていくことが肝要である。実際には日々いろいろな情報に接する中で、MY 行動宣言をしたから行動がこう変わったというのは、原因結果の1対1では難しいだろう。
- ・藤木委員が言及したように、「なるほど」と思えた宣言なら、長続きしやすい傾向があるのではないか。このような現象について、既存の研究もあるかもしれないし、今後の研究にも期待したい。

(2) 30by30に係る認証マークを使用した調査(仮想の買い物実験)結果の報告

資料2「30by30に係る認証マークを使用した調査(仮想の買い物実験)結果の報告」事務局より説明

【質疑応答】

(IUCN-J 道家氏)

・結果について有意差が見られるとあり、6～7円向上したというのは、向上率として、よい数字なのか、これだけしか上がっていないのか、比較できるほかの情報があれば聞きたい。

(佐々木座長)

・今回の実験では、そこまでの比較はできていない。実装するときに、調べる必要があるだろう。

・この調査の企画を検討したとき、私が最初に出した案は、30by30 のマークを付けたときと、例えばSDGs マークのような他のマークを付けたときに、上がり幅がどう違うかという観点だった。今回の調査は、それよりも詳細な説明文などに焦点が当たった。実装を考えると、比較をしながら行う必要があると思う。

(参加者)

- ・調査の対象群や介入群の年齢構成など、属性はどのようなであったか？
- ・世代別で回答に差があったか？

(佐々木座長)

- ・全世代万遍なく、関心がある方、ない方を集めた。

(事務局)

・生物多様性の認識に関しても、意味まで詳しく知っている方は非常に少ない群だったと認識している。

- ・世代別の回答差については、そこまで分析できていない。今後、結果を見ていきたい。

(藤木委員)

- ・30by30 のロゴを認知されている人といない方の差は？

(事務局)

- ・30by30 のロゴマークを知っている方は10%以下なので、比較まではできなかった。

(藤木委員)

・認知していないロゴに対して購買意欲が上がるという現象がよく分からない。何を見て高く買おうと思ったのか？

(事務局)

・今回はロゴマークに説明を加えた。30by30 の言葉の認知度も低いので、説明が効いているのではないかと。

(藤木委員)

・今後、企業に取り組んでもらおうとするのであれば、ロゴを付けたので購買意欲が上がったと言えるような状況、設計を今後進めていく必要があるだろう。

(佐々木座長)

・新しいロゴを作ったときに、そのまま使おうとしがちだが、どういうタイミングでロゴを実装して社会に入れるとよいのかも戦略的に大事だということが分かる結果だった。

### (3) 生物多様性の主流化に関する活動事例の共有

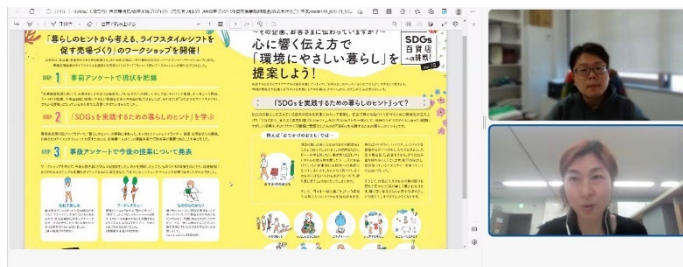
(佐々木座長)

久保委員、藤木委員と一緒に実施した、  
実証プロジェクト「生きもの情報のコレクション  
と金銭寄付のマッチング」の話題提供



(事務局)

資料『「暮らしのヒントから考える、ライフスタイルシフトを促す売場づくり」ワークショップについて』説明



### (4) 行動変容 WG の来年度以降の活動方針について

資料4「行動変容 WG の来年度以降の活動について」事務局より説明

【質疑応答】

(久保委員)

・国家戦略について。基本戦略4だけでなく他の部分にも関わってくると強く感じおり、基本戦略4に限る必要はないと強く感じている。企業側の取組は、この枠でいうと基本戦略3に入るのではないかと。今回、佐々木座長にリードしていただいた調査は、基本戦略5に関わると思う。行動変容は文字としては基本戦略4に入っているが、ワーキンググループとして

は幅広にもう一度整理していただき、次年度、どこに貢献する調査、情報なのかとかをまとめていただけるとありがたい。

(参加者)

- ・環境省の他にも、農水省、経産省、国交省とかいろいろなところが 30by30 に絡んでくるだろう。企業としては、他省庁との調整、統一してやって欲しい。
- ・30by30 アライアンスのロゴを使った調査など、他の省庁と方向性を合わせたり、合同で行ったりしていただくと企業としても対応しやすいと思う。

(事務局)

- ・国家戦略も、環境省だけではなく、関係省庁会議の中で議論されている。今回は環境省の具体的な施策だけを紹介したが、他の省庁の施策が紐づいているものもある。
- ・J-GBF 自体が関係省庁も入った、いろいろなステークホルダーが集まっているプラットフォームであることが強みなので、連携をとっていきたい。

(IUCN-J 道家氏)

- ・来年度の活動内容(案)の tips 研究について、これも大事なことだと思うが、理解促進に限るのか? 可能であれば、行動変容につながる部分を上げてもらえるとよい。
- ・IUCN の教育コミュニケーションの委員会では、コンサベーション・サイコロジーという、自然を守るために、心理学や行動経済学のノウハウを活用するワークショップを行ったことがある。学ぶことが非常に多かった。人の行動のスイッチをどう押すかなど、経験則だけでなく、体系的にも理論的な部分も含めて学べるような環境に今はなっていると思う。
- ・理解促進という伝え方だけではなく、行動変容についての勉強会を皆でできるとよい。

(佐々木座長)

- ・1つ目の議事で、MY 行動宣言を色々な形でやりやすくしていき、その先の行動がどう変わったかをどうやって測っていくかという課題があった。そこに直接つながるものを、活動内容案に入れるべき。
- ・バイオームさんと昨年秋に行ったようなイベントを来年度にもう一度できるのであれば、宣言した後に本当に行動変容につながっているのかまで追ってみるとか、行動変容にこだわった先進事例を作ることも含められるような活動内容にするとよい。
- ・来年度は、今日の意見も反映させてブラッシュアップした活動計画を立て、年度始めから12か月どう走っていくかを、できるだけ具体的に一緒に考えたい。
- ・行動変容ワーキンググループ全体で話しあうこととは別に、サブグループのようなものを作って戦略会議のようなものを行いながら、実行部隊を作っていくことも大事。

(事務局)

- ・昨年 12 月に新国際枠組みが策定され、国家戦略案も 3 月末に閣議決定が予定されている。ようやく J-GBF の総会も 2 月に初めて行い、J-GBF が来年度から本格的に動き出すところ。
- ・この活動計画はまだ十分ではないので、来年度以降の動き方については、事務局で検討して、座長とも相談しながら固めていきたい。

(久保委員)

- ・国家戦略の話は、やはり気になっている。基本戦略 4 に行動変容が入っているということだが、他の基本戦略で人の行動や認識に関して研究している、もしくは動いているワーキングがあるのであれば連携した方がいい。

(事務局)

- ・環境省全体では、脱炭素の関係で新しい国民運動が立ち上がっていて官民協議会があり、脱炭素に絡めて、環境分野へ普及啓発していこうという大きな動きを始めている。
- ・その他では、熱中症や自動車排ガスなど広く普及啓発をしているが、ワーキングという形があるかは現時点では把握していない。

(久保委員)

- ・先程も意見があったが、省庁を超えて同じテーマを扱っていることもかなりあるのではないかと。会議での連携は難しいだろうが、実際に存在しているかなどは情報の共有を進めてほしい。

(参加者)

- ・消費者個人の行動変容を扱うのは大変面白い取組だと思う。脱炭素、生物多様性を含めて行動変容につながる取組をさらに促進していただければと思う。

(参加者)

- ・既に地方では具体的に行動し、取り組んでいる団体などが多くあるが、そうした活動との連携やシナジーは考えていないのか。リンクさせることで、各地方の取り組みを加速させることにもつながると思う。

(事務局)

- ・J-GBF では地域連携フォーラムもある。自治体の力を借りながら行わないと、環境省本省だけでは難しい。今後、自治体との連携も進めていきたい。

以上